

タイの医療と文化

2008年10月

M I C かながわタイ語医療勉強会

医療事情の違い、医療に関する考え方の違い

都市部の富裕層を相手にした私立病院では、ホテルさながらの徹底したサービス業としての医療が提供されている。通訳部門を持ち、コーディネーターはサービスとしての通訳提供を心がけ、ホテルのコンシェルジュさながらの業務を行っている。

大手の私立病院では医師と病院は業務契約を結び、医師は成績が悪ければ診療の場を失うし、より良い環境や年俸を求めて移籍することも可能である。地方でも県庁所在地、あるいは軍の主要駐屯地や王室に関わりがある等の場合は、公立の大規模病院が整備されている。しかし一般的には、小さな病院やクリニックで医師がいくつもの科を診ているのが普通である。

地方、特に田舎では、西洋医学より聖水をかけ呪文を唱える祈祷師に頼る民間信仰もまだ残っている。高名な祈祷師であればなおのこと、たとえその甲斐なく亡くなってしまったとしても恨むことはない。これが運命だったのだというあきらめの境地になる。

特に高度な医療を必要とするときは経済的に大変で、金の切れ目が命の切れ目になるのが現状であった。薬も飲まずに休養だけで凌ぐ、街で薬を買って自分で治す、祈祷師あるいは医者にかかる等、自らの経済的状況の範囲内において医療の受け方や使い方を選択しているが、恐らく自分で薬を買って治すことが一番多いのではないだろうか。

タイの薬は一般的に日本の薬より強い。処方箋がなくとも一般のドラッグストアで、しかも粒単位での購入が可能。どんな田舎に行っても薬を置いているお店があり、都会では過剰とも思えるほどに薬屋がある。漢方薬を専門に扱う店も多い。

タイでは特にパラセタモール（鎮痛・解熱薬）をよく使う。また、口紅の容器のようなものを鼻の穴に押し当てている人をよく見かける。ユーカリ油、メントール、樟脳、竜脳を成分とした固形あるいは液状の薬が入っており、気分が悪いときに匂いを嗅ぐと気分がスッキリする。痒み止めとして併用できるものもある。

2001年4月、国民医療保障制度が試行的に始まり、2002年4月には全国で施行された。指定された公立医療機関で、通院または入院治療を薬代も含め1回30バーツ（約90円）で受けられるようになった。2006年11月からはそれも無料となっている。この制度によりタイの医療は大きく変わった。今までは経済的なことを考えて受診を躊躇していた国民が病院にかかるようになった。一方、多忙や激務を恐れ医師不足が起きたり、この制度に注ぐ国家予算手当てのために予防医療の予算が減ったせいかボウフラ駆除が手薄になり、蚊の大量発生ひいては Dengue 熱感染件数の増加につながるなど、負の面も見逃せない。指定医療機関では、国の補助が不十分なため医師不足や医療レベルの低下が起きるなど、国としても財源の問題は大きな課題として残したままである。

食事文化の違い

タイの料理には香草や薬草が多く使われている。素材の幅が極めて広く、肉、魚、野菜、穀類をバランス良く摂取できる。辛い、甘い、酸っぱい、塩辛いという4つの味のバランスの妙がタイ料理の醍醐味である。

主食は米だが米だけを口に運ぶことはなく、副食と合わせながら、あるいはかけ飯として提供される。麺類も複数種類があり、ナムプラー（魚醤）、砂糖、酢、唐辛子や胡椒を使って最後の味付けは食べる人が自分の好みで行う。

屋台文化の国である。店先の小さなテーブルで食事をしたり、ビニール袋に詰めてテイクアウトをしたり、それぞれの生活に合った形で屋台を利用している。

出産文化の違い

タイでは、妊娠したときから病院で栄養剤、ビタミン剤等のサプリメントを処方される。3~4kgで生まれるのが普通で、それ以上で生まれることも珍しくない。腹帯は勿論、マタニティーガードルなどお腹を締め付けるものも使わない。

仕事を持つ女性が多いが、条件が許せば出産ギリギリまで仕事を続ける傾向（出産前1~2日）にあり、出産後の職場復帰も早い（一週間~一ヶ月程度）。

現在、タイは帝王切開が多い。理由のひとつとして、誕生日の日柄の良し悪しがある。占いをもとに出産日を決めて帝王切開で産むことが多い。また、別の理由として、出産時の痛みや膣が広がることを避けたいという思いがある。

新生児は四角形の布で体全体を包まれて数日間過ごす。子どもが1ヶ月になると髪の毛を剃るという風習がある。胎内にいたときの髪の毛は汚れているので、剃って新しい髪が生えてくるようにという慣わしである。地方では村の長老に剃ってもらうことが多い。

出産後は子宮復古のためにお腹を温めるという習慣がある。さまざまな効果をもつ薬草を使ったサウナのようなものといえば良いだろう。体を冷やさないように、冷たいものを食べたり飲んだりすることも控える。地方では1ヶ月ほどそのように過ごす。都市部では薬草サウナのレンタルサービスがある。都合に合わせて数日間レンタルし、子宮復古のために薬草サウナを使うようである。

考え方の違い、などなど。

一般的にタイ人の気質は『マイペンライ』や『サバーイ』の文化であると言われている。『マイペンライ』を日本語に訳すと「大丈夫ですよ」「心配しなくていいですよ」という感じだろうか。相手に対する寛容な気持ちと合わせて、むだな争いはしたくないという気持ちがあるように見える。

『サバーイ』は「快適な」とか「気楽な」という意味。ことばを変えれば、自分の快適さを求めるため、時には責任感が希薄になってしまう。例えば、病院の予約を自分の都合（遊びなど）でキャンセルし、後日予約無しで受診をして長時間待たされることに腹を立てることがある。約束することがどういうことなのか、約束を守らないとどうなるのか、認識していないところがある。

上下関係やその場の対人関係を考えて、謙虚が故に、あるいは面倒くさいことを嫌うため、何でも「ハイ、ハイ」と返事をしがちである。ハッキリと主張しないことが後に災いとなる場合もある。

一般的にタイ人と接するときの注意。

- ・ タイ人全員が英語を理解するとは限らない。日本の医師は外国人なら英語を理解すると思いがちである。
- ・ タイ人は、理解していないのに「ハイ」と言ってしまう。本当に理解しているのか、どのくらいわかっているのか気をつけなければいけない。

- ・ タイ人女性は胸の診察を恥ずかしがる。
- ・ お守り（ペンダントタイプ）は非常に大切なものである。それを外してもらうときは、きちんと理由を伝える。

タイは仏教国である。『輪廻』を信じ、良い生まれ変わりをするために『徳』を積む。『輪廻』を信じているので死を恐れないところもある。常にお守りを身に付け、神々の刺青をしている人も多い。また、タイは仏教国であるとともに『霊』などの民間信仰も厚い国である。それが祈禱師への信仰にもつながり、さまざまなことを『霊』と結びつけて考えることも多い。